



Data 2022-135

監督: ロウ・イエ (婁燁)

出演: ジン・ポーラン (井柏然) / ソン・ジア (宋佳) / チン・ハオ (秦昊) / マー・スーチュン (馬思純) / チャン・ソンウエン (張頌文) / ミシェル・チェン (陳妍希) / エディソン・チャン (陳冠希)

👁️👁️ みどころ

私は中国第6世代監督の旗手の一人、ロウ・イエ監督が大好き。過去7作を鑑賞しているが、その問題提起の鋭さは驚くばかり。なぜ【完全版】なのかを含めて、第10作目となる本作の出来は？

監督の問題意識は、2013年4月14日、広州市の「都会の村」で起きた再開発を巡る「開発業者」VS「住民」の立ち退きを巡る騒乱。これは都市問題をライフワークにしてきた私の問題意識と同じだ。

野外セックスに励む若い男女が白骨死体を探り当てるシーンから始まる本作は、1980年代から30年間に及ぶ中国の経済成長の中で起きた人間の歪を、時代に翻弄された7人の男女の姿から暴き出していく。そのため、広州から始まる舞台は、台湾にも、香港にも。

日本には憲法があり、都市再開発法があるが、中国は法治ではなく人治。しかも、土地は国の所有だから、再開発事業を押し進める開発業者が政府と癒着するのは必然。都会の村での騒乱と、そこでの住民の1人や2人の死亡は想定内だが、まさかトップの役人が死ぬとは！これはきっと他殺だが、その犯人は？

他方、冒頭の2006年に発見された白骨は誰の死体？日本の土地バブルも凄かったが、中国のそれはもっとすごいから、紫金不動産の創業者の「我が世の春ぶり」はすごい。しかし、そんな男の女関係は？山ほど重ねてきた秘密の所業の数々は？

未熟な若手刑事がセックス・スキャンダルを含む、さまざま陰謀に巻き込まれていくのは仕方ないが、その捜査はどこまで進むの？これは面白い！フラッシュバックが多用される30年間の歩みを、“年表”を片手にしっかり楽しみ

たい。1度で理解できない人は、2度でも3度でも！

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*

■□■いきなりの男女の絡みとその後の暴動シーンにビックリ！■□■

本作冒頭、若い男女が河川敷で絡み合うシーンが、暗いトーンの色調の中で、いきなり登場！これは一体ナニ？本作はフランスやイタリアのポルノ映画？一瞬そう思ったが、行為の最中に2人は何かを発見したらしい。そのため、2人は驚いて現場を離れていくことに・・・。

その直後、スクリーン上には、立ち退きに反対する住民たちの騒乱と、それを抑圧する警察官たちの姿が登場する。多くのケガ人も発生しているから、この暴動はかなり激しいものだ。そこに乗り込んできたのが、開発の責任者であるタン・イージュ（唐奕傑）（チャン・ソンウェン（張頌文））。彼は自分は地元出身であることを強調し、「俺もこの街を愛してる。」「再開発が必要だ。そこにこそ未来がある」と、もっともらしい理屈（正論）を述べて暴動を抑えようとしたが、住民からは「キレイごとを言うな！」と一蹴！そして、タンは秘書と別れてビルの5階に上っていたわずかな間にそこから転落し、死亡してしまったから、アレレ。これは一体ナニ？

そんなスクリーン上の展開を見ているだけでは、観客は事態を飲み込むことはできないが、字幕表示やTVから流れる実況中継のニュースを聞くと、なるほど、なるほど・・・。

■□■日本の不動産開発は？中国の不動産開発は？■□■

日本の土地バブルが弾けたのは1989年。日本では1960年代後半に、都市計画法の改正、建築基準法の改正、都市再開発法の制定、という「近代都市三法」が成立した。そして、「所得倍増計画」を掲げた池田隼人首相が押し進めた「高度経済成長政策」に続いて、田中角栄が陣頭指揮を取った「日本列島改造論」に基づく「新全国総合開発計画」（新全総）路線によって、空前の土地開発ブームが起きた。それを後押ししたのが金融政策、つまり銀行による無尽蔵な不動産融資だ。

他方、中国では、毛沢東が主導した文化大革命が1977年に終焉した後、1980年代からの「改革開放政策」を打ち出した鄧小平は、日本の新幹線からも学んだが、それ以上に、「土地は国のもの」という社会主義国特有の制度の下で、中国特有の不動産開発を推進した。それが、国有の土地の“使用権”を民間に払い下げ、その上に民間の資本で住宅を建て、人民に分譲する、というものだ。日本で1960年代に起きた住宅ローンとセットになったマイホームブームは土地と建物の所有権を取得するものだったが、中国のマイホームはそれとは根本的に違うものだ。

■□■7人の男女を軸に描くネオノワール・サスペンス！■□■

それはともかく、冒頭に見た暴動は、2013年4月14日に広州市の開発区域の一画、天河区“都会の村”で起きたものだ。怒った村民たちによる集団暴動になったのは、立ち

退き料の合意がないまま、いきなり建物取り壊しが始まったためらしい。日本の都市再開発法の根幹は、等価による権利変換システムにあるから、土地・建物の所有者は、再開発によって土地・建物を失うけれども、それと等価の補償金を受け取ることができる。法治国家たる中国にはそれと同じような法律はないの？また、冒頭に見た男女の絡みは、2006年、広州市内を流れる北江（バイジャン）の河川敷のもので、このカップルが驚いて行為を中止したのは、ある変死体を発見したためらしい。

本作のイントロダクションには、「広州市の都市再開発で取り残された一面のシエン（洗）村というビジネス街に囲まれた“都会の村”で2010年に実際に起きた暴動をヒントに、80年代の改革開放が進み、90年代に入り、社会主義市場経済が推し進められ、2000年代にはバブルが訪れ、人々の欲望が渦巻く現代までの30年間という時代に翻弄される7人の登場人物を中国そして香港、台湾を舞台に描くネオノワール・サスペンスだ。」と書かれている。これは面白そう！

■□■3人の出発は1989年！一方は官、他方は民。女は？■□■

本作は、7人の男女の物語で構成されているが、ストーリーの核になるのは3人の男女。つまり、①冒頭で死亡した男、開発区の担当主任のタン、②民間開発業者の紫金（ツージン）不動産の創業者で社長のジャン・ツーチョン（姜紫成）（チン・ハオ（秦昊））、そして、③タンの妻、リン・ホイ（林慧）（ソン・ジア（宋佳））だ。

この3人は1989年に出会っていた。当時、リンはジャンと付き合っていたが、ジャンが既婚者だと知って別れ、タンと結婚。台湾に渡ったジャンは、起業家として成功し、2000年に広州に戻り、紫金不動産を創業。そして、役人であるタンのコネクションによって、ジャンの会社は開発事業を獲得し、タンは開発区の担当主任に昇格していた。

2014年の今は、この3人が知り合ってからすでに25年経っていたが、今や3人とも順風満帆。その豊かな生活ぶりは群を抜いていた。役人のタンはそれをひけらかすことはできないが、民間業者であるジャンの贅沢ぶりは、まさに“わが世の春”だった。そんな状況下、突然タンが死亡。これが事故なら仕方ないが、もし殺人事件だとしたら、その犯人は・・・？動機は・・・？2006年の変死体との関連は？

■□■ヤンの捜査は？糸口は？アユン失踪事件との関連は？■□■

タンの転落死の捜査のため派遣されたのは、若手刑事のヤン・ジャートン（楊家棟）（ジン・ボーラン（井柏然））。タンの転落死は事故死？それとも殺人事件？そんな冒頭の問題提起を見ると、本作は刑事モノ？サスペンスもの？それとも、不動産開発に絡む社会問題提起作？本作は中国第6世代監督の一方の代表であるロウ・イエ（婁燁）監督の10作目だから、きっとその両方だろう。

ヤンの捜査は、タンとジャン、そしてタンの妻リンの身元を洗い出すことから始めることに。ジャンは無一文だった台湾時代に、台北のクラブでホステスをしていたリエン・アユン（連阿雲）（ミシェル・チェン（陳妍希））と知り合い、ゾッコンの仲に。そして、2人

で起業した貿易会社が成功し、アユンは紫金不動産の最高財務責任者の座に就いた。ところが、2006年にそのアユンが失踪！他方、当時刑事だったヤンの父親は、アユンの失踪事件を調べている最中に交通事故に遭って、再起不能となり、介護施設に入居しているらしい。この父親が北江の河川敷で発見された死体のDNA鑑定を求めたにもかかわらず、放置され資料も消えてしまったことを知ったヤンは次第に、アユン失踪とタン殺害の両事件にジャンが関わっているのではないかと疑っていくことに。

■□■ヤン刑事危うし！遂に免職！香港へ逃亡！これはワナ？■□■

007ことジェームズ・ボンドは、“殺しのライセンス”を持ったイギリスの優秀なスパイだが、彼の唯一最大の欠点は女好きなこと。そのため、25作も続いたシリーズでは、常に彼のセックステクニックと女との絡みが一つの見せ場になっていた。しかし、本作の中盤は、リンの家に招かれたヤンがリンの仕掛ける誘惑のワナにはまっていく様子が描かれるので、それに注目！しかも、今時はそんなスキャンダルがSNSで拡散されるから、さらに大変だ。

他方、捜査を続けていたヤンは、ある日タンの秘書だったワン（王助）から、タンの殺害事件当夜にアユンの姿を見たとの連絡を受けたものの、その直後にワンは殺されてしまったから大変。さらに、ヤンはワン殺しの嫌疑をかけられたうえ、免職に追い込まれてしまったから、アレレ……。自分をワナにはめたと怒りをぶつけるヤンに対して、リンは香港に逃げるようにと偽造渡航許可証と金を手渡し、さらに、ヤンが去った後、リンはジャンに電話をかけ、ヤンを見逃してくれなければ警察に自供すると迫ったが、さて、リンの本心は？当初のリンの誘惑がワナだったことは明らかだが、それはリンだけの思惑？それとも誰かの指示によるもの？また、その後の展開はどこまでがワナ？

■□■舞台は香港に！新たに探偵とヌオが登場！■□■

2013年当時、中国本土から香港に渡るのにどの程度の書類が必要なのかはよくわからないが、リンからもらった偽造の渡航許可証によって、ヤンは容易に香港に逃走できたらしい。香港に、かつて父と一緒にアユン失踪事件を調べていた探偵のアレックス（エディソン・チャン（陳冠希））がいたという設定は少し出来すぎだが、それは横に置き、その後はヤンから捜査に協力してくれと頼まれた探偵アレックスの奮闘に注目！

他方、香港で新たにもう一人登場してくる美女が、タンとリンの娘、ヌオ（諾）（マー・スーチュン（馬思純））だ。かつてリンはジャンと恋人関係にあったことは明白なうえ、ジャンは007以上の女好きだから、ヌオはホントにタンとリンの娘なの？ひょっとして、ジャンとリンの間に生まれた子供では？

本作を観ている観客の誰もがそんな疑問を持つのは当然だ。そして、何よりもそれはヌオ自身が持っている疑問だったようだし、ジャンへの疑惑に迫っているヤンも当然、同じ疑問を持っていた。そんなヌオの出自にまつわる謎が、本作の人間関係、とりわけタン、ジャン、リン3人の人間関係を複雑にしていることは明らかだ。

ヤンは捜査のため、当然のように、香港の大学に通っているヌオに接近したが、ヤンに恋心を抱くヌオは思わずホテルにヤンを誘うことに。アレレ、広州市でセックススキャンダルを起こしたヤンは、香港でも再びセックススキャンダルを・・・？

■□■内容豊富！フラッシュバック多用！歴史年表の活用を！■□■

私は年に一度、大阪大学法学部のロイヤリングで「まちづくりの法と政策」と題する講義を行っているが、近時そこで多用しているのが年表。都市問題の展開を中心テーマにしながら、そこに私の諸活動との絡みを説明するには年表が1番だ。それと同じように、本作のパンフレットには“歴史年表”があり、1978年以降に中国で起きた様々な事象と、本作の中で起きる様々な出来事を対照させて掲げている。

本作は129分だから標準の長さだが、そこに盛り込まれている内容は豊富。しかも、本作はヤン刑事の捜査の進展を基本軸としながら、フラッシュバック手法を多用して、やたらに時間軸を動かしていくから、ぼーっと見ていたのでは、ストーリーの全体像は掴めない。そのうえ、ロウ・イエ監督特有の、暗い画面と揺れ動く手持ちカメラによる撮影が随所に登場するので、きちんと目を凝らしていなければスクリーン上の展開の意味が掴めないことになる。ちなみに、冒頭の若い男女のラブシーンにしても、その“行為”にばかり目を向けていると、女の子が右手に探り当てた遺骨を見て驚き、大声を上げながらすっ裸のまま逃げ出していくシーンの意味さえわからないうらう。

この歴史年表の第1のポイントは、2006年にそんな男女がエッチをしている最中に発見した遺骨は誰のものか、ということ。第2のポイントは2013年4月14日に起きた騒乱だ。しかし、本作ではその前後の期間を通じてタン、ジャン、リンの3人、それにアユンを加えた4人の男女にはどんな波乱の物語が・・・？本作の鑑賞については、多用されるフラッシュバックのシーンの意味を正確に理解するためにも、この歴史年表をしっかり活用したい。

■□■本作は完全版！すると当局の検閲は？観客の反応は？■□■

本作は当局の検閲によって一部カットを余儀なくされた部分を復活させた129分の“完全版”。それに対して、第20回東京フィルメックスのオープニング作品として2019年10月に日本で初上映されたバージョンは北京市映画関係部署の審査済みのバージョンで124分より5分長く、検閲によりカットを余儀なくされた部分を復活させた129分の『シャドウプレイ【完全版】』というタイトルで公開を行うそうだが、一体どこが修正もしくはカットされたの？多分、それは誰にでもわかるだろう。

それはともかく、ロウ・イエ監督は第6世代の旗手の1人だが、その作風には大きな特徴がある。私は、①『ふたりの人魚』（00年）（『シネマ5』253頁）、②『パープル・バタフライ』（03年）（『シネマ17』220頁）、③『天安門、恋人たち』（06年）（『シネマ21』259頁、『シネマ34』300頁）、④『スプリング・フィーバー』（09年）（『シネマ26』73頁、『シネマ34』288頁）、⑤『パリ、ただよう花』（11年）（『シ

ネマ32』136頁、『シネマ34』294頁)、⑥『二重生活』(12年)、『シネマ35』152頁、『シネマ44』251頁)、⑦『ブラインド・マッサージ』(14年)、『シネマ39』46頁、『シネマ44』258頁)を見ているが、当局に睨まれても、それをものともしない彼の問題提起の鋭さは驚くばかり。とりわけ、スパイものである『パープル・バタフライ』には驚かされた。

そんなロウ・イエ監督の第10作目に当たる本作は、2016年にクランクインし、2017年春に完成、北京市の映画関係部署の審査に入ったが、その後約2年間、当局から繰り返し修正を迫られ、中国本土での公開日まであとわずか7日というところまで作業は続いた。そして、2019年4月4日に中国本土で公開されると、3日間で約6.5億円の興行収入を記録する大ヒットになったようだ。さらに、本作は、中国公開前の2018年11月に台北で開催された第55回台湾金馬奨において、監督賞、撮影賞、音響賞、アクション設計賞の4部門でノミネートを果たし、2019年2月の第69回ベルリン国際映画祭パノラマ部門で上映された。日本では2023年1月20日からの公開だが、大ヒットを期待したい。

■□■邦題の意味は？原題の変遷は？原題の意味は？■□■

本作は、撮影当初のワーキングタイトルは『地獄恋人』だったが、完成段階で『一场游戏一场梦』(一夜のゲーム、一夜の夢)とされた。これは、劇中とエンドロールで登場する、改革開放の初期に流行した台湾の歌謡曲の題名であり、その英題が「The Shadow Play」だ。しかし、この中国語タイトルは国家電影局の検閲で使用不可になったため、同じく改革開放初期の台湾の流行歌である『風中有朵雨做的雲』(風の中に雨でできた一片の雲)を最終タイトルにしたようだ。

劇中にはもう1つ、「夜」という中国の流行歌が使われているが、パンフレットのインタビューでロウ・イエ監督は「これらの歌が映画の内容を決定的にするかということ、そうではないと思いますね。映画の内容と関係はあるけれども、映画自体さらに重要な意味を持っていると思います。」と語り、『夜』と『一场游戏一场梦』はどちらも夢について歌っていて、素敵な曲です。暗闇の夢の中に帰っていくわけですが、劇中ではその夢は決して美しい夢ではなかったということですね。」と説明している。私の中国語の勉強は少しずつ進んでいるから、これらの曲の中国語の歌詞が示されれば大体の意味はわかるが、さすがに監督が語っているレベルまでは理解できない。しかし、字幕を見ながら、一生懸命聞いてみれば、何となく……。

2022(令和4)年12月20日記

『日本と中国』2273 (2023年2月1日)

シャドウブレイ [完全版]

全国順次公開中



©DREAMFACTORY, Travis Wei

監督：ロウ・イエ (劉偉)
 出演：ジン・ポーラン (井柏然)、ソン・ジア (宋佳)、
 チン・ハオ (秦昊)、マー・スー・
 ソンクワン (張歆文)、ミンシェイ
 ル・チン (陳希希)、エディ
 ソン・チャン (陳冠希)

配給：アップリンク
 2018年 / 中国 / 129分 /
 北京語・広東語・台湾語 /
 DCP / 1851 / 日
 字幕：樋口祐子
 配給・宣伝：アップ
 リンク

土地は誰のもの？ 80年代の日本の土地バブルはなぜ生まれ、なぜ89年に弾けたの？ そんな視点から、私は中国第6世代の旗手、婁燁監督が本作で見せた鋭い問題提起に拍手！ その問題意識は、まちづくりの法と政策、都市開発をライフワークにしてきた弁護士私のと同じだ。まずは、2013年4月14日に広州市の「都会の村」で起きた開発業者VS住民の立ち退きを巡る大騒乱に注目！

野外セックスに励む若い女性が白骨死体を探り当てるシーンから始まる本作は、89年から30年間に及ぶ中国の経済成長の中で起きた人間の欲望と歪みを、時代に翻弄された4人の男女の生きざまを中心に暴き出していく。そのため、舞台は台湾にも香港にも拡大！

日本には憲法があり、都市計画法・都市再開発法があるが、中国は法治ではなく人治しかもすべての土地は国有だから、開発業者が政府と

癒着するのは必然。冒頭に見る血なまぐさい抗争と数名の住民の死亡は綿密だが、殺人トップが転落死することは！ これはきつと他殺！ その犯人は？ 他方、06年に発見された冒頭の白骨は誰のもの？ 日本の土地バブルも凄かったが、中国は何でも日本の十倍だから、本作に見る開発業者の「我が世の春、はすごい。だが、そんな辣腕男が山ほど重ねてきた悪行の数々は？ 女関係は？ まだ、彼と結託して肥大化を続けた殺人トップの権力と出世の階段は？ 2人を結び付けた共通の女は？ 未熟な若手刑事がセックス・スキャンダルを含むさまざまな醜態に巻き込まれていくのは仕方ないが、彼の殺人捜査への熱意は？ その根源は？ これはメチャ面白い！ フラッシュバックが多用される30年間の歩みを4人の「年表」を片手にしっかり検証しながら楽しみたい。複雑すぎず理解できない人は2度でも3度でも！

— 4人の男女の欲望と歪み、30年間の「年表」片手に検証 —

土地開発を巡るこの大騒乱はなぜ？ この白骨死体はなぜ？

熱血弁護士
坂和章平
 中国映画を語る (71)



（さかひ・しやうへい）
 1942年、千葉県鎌倉市生まれ。本原法政大学法学部。都市開発に関わる訴訟を多く手がけ、旧鎌倉市計画課長・石川眞一、同僚日本不動産協会「業務操作員」を急賞。昭和映画「中国大劇」(1960)主演。『子このオウチン』舟橋元

映画を斬る「シリーズ」をはじめ映画に関する著書多数（公刊）。中日交渉会々々、NPO法人広府日本交渉会理事。